不思議の国へガーリーアリス

相樫りわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不思議の国へガーリーアリス

【Ｎコード】
Ｎ０４７４Ｆ

【作者名】
相樫りわ

【あらすじ】
ガーリー大好き美少女、光珠の落っこちた穴の中、そこは常識外れのハチャメチャな不思議の国！アリスを待っていたのは優しい白兎と腹黒の詩人チェシャ猫と和服が好きなハートの女王と――？アリスモチーフ小説にあるまじきガーリー物の好きなアリスを主人公にしためちゃくちゃ小説！・・・たまには、いかが？

プロローグ　（前書き）

連載第二作目。頑張ります！

プロローグ

アリス　アリス　　不思議のアリス

この国へやってきた

白兎を追って不思議の国へ

さあもう君は　後戻りできないよ

ここへ来たのは君なんだから

白兎のせいじゃない

アリス　アリス　　ようこそ不思議の国へ

僕らは君を帰さない

トゥリリリリリリ！

「う～ん・・・・・・」
光珠(ありす)は伸びをして目を覚ます。
今日は華の日曜日、いつも４時起き、寝不足のあたしは今日こそ思いっきり寝坊しようと考えていたのにどうやら４時の目覚ましをロックし忘れていたらしい。

「ん～～～っ！！う、うるさい～～ッ！」
日本人にあるまじき地毛の金髪にカラコン無しの深いコバルトブルーの瞳の少女は起き上がり、ケータイを開いてアラームをとめる。
「何で消し忘れたんだろうあたし・・・」
私立中にいく自分としては我ながら情けない・・・
もう一度寝ようと横たわるが、この部屋の空気が蒸しているようでどうにも眠れない。
「しょうがないな～。仕方ないし、目覚ましにでもお風呂入ろうかな・・・」

あたしはシェルピンクの甘ロリ系なネグリジェのままむっくり起き上がる。茶色に近い金髪にネグリジェの色が反発して、目に痛い。
「ううー」
あたしは、ピンク色の天蓋ベッドを抜け出すと、衣類をしまってある引き出しを探りおもむろにセラミックホワイトのフリルがたくさん付いたバルーン袖のブラウスと、明るいバチターブルーのエプロンドレスを引っ張り出した。
「この服似合わないと思うけどなー」
ぼやきながらバスルームに入る。

「今日はなんか気分がねー」

☆
★
☆

暫く後。バスルームからドライヤー音が聞こえたかと思うと、エプロンドレスを着た光珠がでてきた。

（今更ながら、光珠の容姿はとても可愛くて蒼い瞳や長くゆるパーマのかかった金髪が日本人離れしたくっきりとした顔立ちにぴったりと合っていた。足や腕も細く長く、どちらかというとアイドル級、エプロンドレスを着たら、さながら不思議の国のアリスのように見えた。）

「今日は外に出てみようかな」
朝日が綺麗だし、と付け足してあたしはフリルの付いたニーソをはいた。
玄関先で濃いコバルトブルーのヒールを履いて、あたしは外へ出る。
涼しくて紅い朝焼けが綺麗でとても気分がいい。

「そういえば、朝焼けが綺麗な日は雨が降るんだったよね」
一人で考える。名門私立中生のあたしは可愛い制服のためだけに入った学校でそんな無駄知識を学んでいた。って言うか、そのトリビアが小学生レベルなのが悲しいよね・・・

広い芝生の庭に生えた2、3メートルの桜の木の根元に腰掛けた。
「気持ちいい」
思ったことを呟いた。それからだんだん眠くなって――――

目が覚めたのは、眠ってからどれくらいたってからだったろう。日もなかなかの高さに上がり、もう9時ごろというところかな？
「寝過ごした・・・」
「おはよう、光珠」
ガーンと思っているとふいに横から声がした。
「ん？お兄ちゃん」
いたのはあたしの兄、白兎（あきと）。そんな名前とは反対に真っ黒い髪にローアンバーの瞳のごくありふれた容姿の１６歳。
「朝から昼寝？光珠にしては珍しいね」
「え、それは昼寝って言わないでしょ？」

と、そのとき。

「うわあ、ヤバイです！時間が！間に合わないいい！！」
「・・・・・は？」

そんな叫び声と共にあたしの目の前を白い物体が横切る。

「・・・・・・うん？」
よくよく冷静に考えてみれば今のは少年で、えーとなに、兎耳が生えてた。
・・・・・え？

「コスプレェェェェェェッッッッ――――？！」
絶叫！！！いやいやだって年下大好きのあたしにとって今のはレア

レア天下のコスプレ少年様だからだよ――――――！！

いますぐに、あの子に会いたい。そんな気持ちでその子を追いかけた。

「あちょっと、光珠！？」

お兄ちゃんの叫びも耳に届かず。あたしは追いかけて、追いかけて、森の中、道に迷った。

「え・・・・・・・・？」

サァァ――ッと血が引く。

「う、嘘」

周りを見回しても、木、木、木。

「いやぁぁぁー！」

「ちょっと、少年君！！どこどこ？えーうそ！あたし極度の方向音痴なのにー！」

パニックパニック、あたしはめまぐるしく首を振り回して少年を探す。うん、眩暈がしてきた。方向もさっぱりわかんなくなったし。

そのとき。

ひょこ。

木の陰から、白っぽい、耳が見えた。

「しょうね――――――ん！！！！！」

叫んだ！

そしてそのうさ耳少年を追おうと2、3歩踏み出した途端、

ヒュ――――――――ン

アリスは、穴に、落っこちましたとさ★

「イッヤァァァァァァァァァ――――――――!!」

プロローグ　（後書き）

光珠だけを紹介いたします。

莉出光珠（りでるありす）
１３歳
ガーリー物が好きで日本人のくせに金髪蒼眼の少女。
ピンクの服を着ると目に痛い人になる。

ぐうたらですがどうぞ読んでやってください・・・

第1話　白兎とアリス

堕ちる、堕ちる、堕ちる――――！！！！

ヤバイです、皆さん。ただいまの状況を冷静に説明すると、白兎少年を追って穴に落ちたというキャ――――！なんです！（訳わかりません！）

「ちょっとォォォ！！このコスプレ少年――――――――・・・・・」

そこからあたしは、意識を手離した。

☆
★
☆

「・・・ん・・」

「・・・さん・・」

「・・・えさん・・・」

「お姉さん・・・」

「ん・・・・」

「お姉さんッッ！！！」
「ハッ！？」

突然の激しい揺れと耳に響く大きな声・・・そぉっと目を開くと・・・

「コ、コスプレ少年ッッッッ！！！」

やーん、よく見ると超可愛い～～♪・・・ではなく！

「大丈夫ですか？お姉さん」
「大丈夫なわけあるかァァ！！えだって、穴から落ちたんだよあたし！？それも5メートルとか半端な量じゃない距離だったんだ！絶対あたしは――――」
そこではっとし、体中をぺたぺた触り、身体を見下ろし、頭を撫で回す。だって、落ちたらどんな風に落ちても頭から落ちて体中が＊＊＊＊＊＊（ピ――――）になるから大丈夫かなって心配になってペタペタペタペタつまりは死ぬのは嫌なんだよー。そしてグロテスクも。
（上のところ、ピーって言うのちゃんと入れたかな？あたしったらパニクって放送禁止ワードをすらすらと申し上げていたから）

でも、触ったり見たりしたところ、外傷は特にないようだった。頭の中身がどうなってるかはわかんないけど。あれでも、あたし誰だっけ・・・？ああそうそう。光珠だ光珠。

「お姉さん・・・少々手荒で申し訳ありませんが、僕は人間違いをしたようです。というか違う人が来ちゃいました」
「え・・・・・・」

「ですからね・・・」
「いやいやちょっと待て？ここはどこなんだ？そして君は誰なんだ？」
「ああ、申し訳ありません。自己紹介もしてませんでしたね。ぼくはここの王子、白兎。そして此処は不思議の国です」
「し、白兎？！不思議の国？！」

え、うそ！何この世界、不思議の国のアリスじゃん！ええおかしくね！？あたしの名前も都合いいことにありすだしね！！

「本当は貴女のお兄様のアリスを連れてくるつもりだったのですが・・・」
「・・・・え？何か思い違いをしているようですが、光珠はあたしです」
「ん？え・・・？！だって貴女はアリスの妹の白兎でしょ？！」
「違います。アキトは兄です。あたしが光珠。だけどお兄ちゃんに何か用事が？」
「そうなのです。アリスに用事が大有りなのです。でも、え、じゃあ女王様が何か手違いを？！いやでも、え・・・」
「何なら帰って呼んできましょうか？」

「・・・帰れませんよ」

「・・・え？」
「帰れないんです、この国。１００億年に一度だけ兎の穴が開いて、外のアリスを中につれてこれるんです。でもタイムリミットは３０分、その間に白兎は世界中を回ってアリスを連れてこないといけないんです。でもそのアリス探しにはルールがあって、アリスは男で

ないといけないんですよ・・・うわぁ、打ち首決定です・・・」
「は?!今物騒な単語を聞いた気がするけど気のせいだよね、そうだよね?!そして何でアリス探してんの?」

「アリスが、この世を、救うんです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「何で黙り込むんですか。その昔、一番初めのアリス・リデルはいろいろとやらかしてくれたのでそのあとから１００億年ごとに男のアリスを白兎が連れてきてですね、そのアリスやその後後世までに永らえるアリスの家系の人々に世直しさせることを決めたんです。」
「・・・知るか!だってうちに男のアリスはいないのに!?それになんで男のアリス?」
「女がやらかしたことは男が責任を取って、女の子を守るっていうのが男の暗黙のルールですから」
う、うわ、にこりと笑ってこの子素敵な発言をしたよ!嫁にしたい!

「・・・というのは嘘で、それは女王様の決めたルールなんです」
「嘘なのかよ!ちょっとキュンとして損した!」
「キュンとしていただけて嬉しいですが、僕はそんなキザキャラにはなりたくないです。それに女王様はこの国の最高権威ですから」

いやいや、そういうことじゃなくね!!!

「うーん、いろいろと納得のいかない点はあるけど」
「それはおいおい、お城で説明しますから。とにかく、お城にいきましょう」

「城ォォォ?!え、まって、うわうわうわわわ・・・」

戸惑ってるうちにぁあたしは彼に姫抱きされて、ヒューン☆と青いお空へひとっとび☆☆

「力持ち過ぎィィィィ！！！！！」
「ツッコミがそこだとおかしぃと思いますよ～。まずは跳べるところにツッコんで欲しかったですね」
「知るかこの怪力持ちィィィィィィ！！！！！！！！キャァァァァ、おろしてェエエエ！！！！」
「いいんですか？ここで落とすと真っ逆さま☆でまず命はありませんね」
「脅しィィィ？！」

そのままあたしは白兎君の首にぎゅうぅぅとつかまって、お城まで飛んでいったのでした。

つ☆づ☆く☆☆

第1話　白兎とアリス（後書き）

短めですね。っていうか、もうマジで涙が止まりません（泣泣
ネタが、ないのです！ネタが！！小説に必要不可欠のネタが！！！
！！すみません・・・取り乱しました・・
ではまだ白兎君の本性はわかっておりませんので、紹介はいたしま
せん。

次回は多分、

『アリスの宿命、白兎の運命、
生き残り世界を救うのはいっ
たい誰？この世の中は、どう
なるの・・・？　　』

です（嘘です。こんなフザけた深刻な話には天と地が逆になっても
なりえません。コメディーが炸裂すると思います・・・）。

第2話　ハートの女王様（前書き）

ちょっとごちゃごちゃした2話ですがよろしくお願いします・・・

ッ

第2話　ハートの女王様

「・・・ここが・・・お城？」
あたしは、目の前に広がった大きな建物を見て呟く。

あたしはあのあと、暫く白兎君に姫抱きのまま連れ去られて、ちょっとヤバイくらいでかい建造物の真ん前に来たところなのです。
しかしその巨大（と言っていいのか？）建造物は、中世のヨーロッパとかにありそうな、シンデレラ城みたいな立派で豪華絢爛でちょっとマジで「え？！」みたいな感じの城だったのですよ。
白塗りの城壁とか金や銀の装飾とか、いやもう書き表せられないほど凄い。

「はい、そうですよ♪」
にこりと笑って白兎君は言う。
「仕方ないので、多分お姉さんにはこのお城に暮らしていただくこととなります」
「セレブ？！」
「生活費は払っていただきます」
「無理だァァァァァ！！」
「では行きましょう」
「スルー？！」

うん、マジでやばい状況になってきたぞ。あたしまだ働けないから。っていうかそれよりむしろ帰らせてくださいよ。帰れないっぽいけど。

☆
★
☆

はーい、ただいま城の中にいまぁす～♪
ってなんか、すごい楽しげなキャラの違うテンションで行きましたが、今はそんなに余裕のあるときではありませんので、本能を押さえるのはやめます。

まあとりあえず、お城の中にいるわけですけれども、初めに言いましたようにここはおかしいです。

広すぎるんです！玄関ホールが！！！なんか、うちは3階建てなのですけれどもそのうちがもう7～9軒ほど入りそうなほど広いのです。この驚き理解していただけます？！「タ●ホーム」のCMがありますでしょう？あのCMのお見本の家くらいのでかさなのですがね、それが7～9軒ですよ！！！おかしい状況ですよね？
でも白兎君は平然とその玄関ホールを通り過ぎていく。いやいや、おかしいって。感覚がどうにかしてるから。助けてください。すでにあたしの心は入ることを拒否ってるから。

「どうしたんです？女王様に謁見に行くのですよ？」
ぼーっと3分ほど家7～9軒くらいあるそれを見つめて放心状態に陥っていると白兎君に声をかけられてわれに戻る。
「う、うん」
たったった。

これまたバカ広い廊下を走って、白兎君に追いついた。
いやでも、廊下の広さも尋常じゃなく、うん、まあ普通に幅としては１０メートルほどあるのでは？まあオリンピックの入場のときに隊が通る道くらいはありそう。それ以上はある。
壁は、紅いハートの柄が白い地に水玉模様のように並べられていて一言で言うとしたらまあ、「目に悪い」だね。青とか緑なら目によかったのに。

しばらくそのバカっぴろくてめちゃくちゃ長い廊下を歩くと、突きあたりが見えた。そこにはちょっと気付かないほど広い、そしてでかい、まあ――――――扉があった。扉って呼んでいいのかどうかもよくわからないけどね。なにしろでかすぎて・・・。

ノックをしようとする白兎君。ちょっとあの余裕な表情がこわばっていて、女王様の前だとやっぱり緊張ってするんだーと思った。

――――コン、コン。

「白兎――――？」
「白兎です、女王様。アリスを連れてきたのですが、何か問題が生じていたようで――――」
「やっとー？遅かったなー。あと5分遅かったら危うく首刈りだったよー♪」
・・・・・よし、幻聴決定。首刈りではなく、首鞠と言ったんだ。
でも危うく首鞠ってなんだろうね？生首で鞠つきすんのかな？ギャー、それって首刈りよりも恐怖(こわ)いじゃん！！！！

「・・・すみません。少々てこずったのです」
「まーいいよ。入ってー」
「失礼いたします」

会話を終えた白兎君は、あたしに囁く。
「ここから先は女王様の部屋です。くれぐれも態度を謹んで、ご無礼のないようにしてください」
「は・・・・・・い」
うわー、ちょっと緊張してきたぞ。ううん、でも学祭で劇やった時よりは緊張してない。うっし、いけんぞ。

ギギギ、ギギィ――――イ・・・
大きな扉が軋みながら開く。
ドクン、ドクン、ちょっとヤバイかも。
ドアを開いた先にいたのは――――――？

「うわ」
和服を着た、１０歳くらいの女の子だった。しかも超可愛い。
「可愛すぎ！！！！！！！！」
いや、あたしは心の中で言ったのだよ？叫んでなんかいない・・・
はずなんですがどうなのでしょう？

「・・・白兎。これは、アリスの妹のアキトじゃないの？」
いやいやまてまて。初めからあたしは物扱いなのかよ。これとか言われたよ。
「いえ・・・どうやら、書類が間違っていたようですよ。この子は、間違いなくアリスです。この子の兄がアキトと言う人だったみたい

ですね」
・・・っていうか、誰もその事についてはツッコまないのね。そしてなんであたしはさっきから存在が空気なんだ？

「まって。とにかく、座って。白兎とアリスが来たときのためにもう1日前からテーブルセット出しといたんだから」
「恐れ入ります、女王様」
「・・・すみません」
あたしも一応挨拶して、目の前にあった椅子に腰掛けた。クッションがふわふわですごく気持ちいい。

「アリス。お菓子も食べてね。白兎は状況報告を」
「あ、はい。いただきます」
うん、フレンドリーで可愛い。あたしは女王様を見つめながらもお菓子を手にとって食べる。

――――おいしい！このクッキー、アーモンドが入っていてココアの味がして繊細・・・あたしが作ったときよりずっとおいしい。
「それ、わたしが作ったの。どう？」
首を傾けて聞いてくる。っていうか、女王様、お菓子作りできるんだ。意外・・・
「あ、はい、おいしいですよ！なんていうか、口の中でチョコチップがとろけます」
「ありがとう。それ生チョコだけど、生チョコも自分で作ったの。喜んでもらえてとっても嬉しいよ」

「・・・それで、状況の方ですが」
「ああ、白兎。忘れてた、で？どうなったの？」
「はい、アキトだと思っていたアリスが、僕を追いかけて穴に落ちて、仕方がないのでつれてきました」

「そう・・・でも、どうしようって言ってももう兎穴は閉じちゃってるし、仕方ないんじゃない？今回は女のアリスで」
「それでいいですか」
「いい。アリス可愛いし♪」
え？！何？！ちょっと、あなたのほうがあたしなんかよりずっと可愛いよ！？何言ってんの！

「・・・・・そうですか。では、家賃の方は」
「は？そんなもの居候からも取ってないのにアリスから取ったりしないでしょ。第一資料間違いはこっちの責任だし・・・まあでも、働いてもいいんじゃない？どうせもう帰れないから、この国で暮らしていくんでしょ。女の子だし自分のもの調達したくなるかもしれない。まあ、バイト料たまるまではこっちでお金は出してあげるから安心してね」
お、おいおい、なんかちょっと経済的な方向に話が飛んでるからね？気付いてね？
って言うか、女王様居候からも取ってないって言ってるじゃん。それなのに取ろうとしたなこの兎め。まあでも、可愛いから許す。
って言うか、城なのに居候がいるのか。誰だろう？

「じゃあ白兎、アリスに部屋を教えて？アリス、これから貴女は城の人間だから。悠々と暮らしてちょうだいね～」
「了解いたしました、女王様」

こうして、あたしの突然のセレブデビュー（？！）は始まったので

したとさ・・・★

第2話　ハートの女王様（後書き）

えーと、せっかくですので2人とも紹介してしまいましょう。

白兎
１０歳
明るいローズマダーの瞳に透き通った白に近い銀髪の少年。兎耳で光珠はコスプレだと思っている。大きな懐中時計を首からさげている。かわいい。

女王様（ローズ＝スカーレット）
１０歳
女王様というか容姿は姫に近いけど国の最高権力者。
濃いライトレッドのウェーブがかった長い髪にバイオレットカラーの輝く瞳。紅が好きで城のデザインを女王になった時点で全部変えたという伝説の持ち主。

ふうー。いかがでしたでしょうか？
ちなみに色は、シーケンですべて調べておりますので気になりましたらｗｅｂ（↑かっこつけたつもり）で「色辞典」を検索してください。シーケンとか出ると思うので、色のサンプルをご覧くださいませ。

ではでは～～！たぶん今週中に2話ほど更新すると思います。次回は説明バンバンでアリスの部屋を登場させる気でいます。そして多分超サブなキャラのあの方が・・・。（あたしの友達の依頼でござ

います）

ありがとうございましたー

第3話　アリスの部屋

「・・・・わぁ・・・・・・！！」

ため息が零れた。

今あたしは、白兎君に、あたしの部屋を紹介していただいたところ。またこれが、ガーリーな部屋なんだわ。ものっそい。

しかも、あたしが大好きな甘ロリだ――――！！甘ロリは神なんだ！ゴスロリもいいけど甘甘が大好きなんだあたしは！

部屋の真ん中には、大きな天蓋ベッドが。フリルがふんだんにあしらわれてシェルピンクで流れるシルクで枕とかにはでかい白リボンがキャー！！もうこの部屋の説明萌えすぎ！

・・・と、で、壁紙なんか、布だよ？布がかかってて、薄くてピンク色のキラキラ光るフリルがダーッてついてんの。可愛い・・！

シャンデリアはブリリアントピンクのガラスと透き通った白いガラスがグラデーションでめっさ可愛いんだよ・・・・？！（落ち着こうね光珠）

ともかく、絶句するほど可愛いのです。そして部屋がでかすぎるのです。

「・・・・・・・・・・・・・」

っていうかさ？洋服箪笥をあそこまでガーリーかつピンクで飾りま

くる必要はないと思うんだあたし。フリルとかレースとかレースとかレースで飾りすぎだから。

あと、部屋の隅にある扉。
見に行ってみると、
「・・・・・マーライオン様！！！」
第一声がおかしいのは見た瞬間に思ったことを言ったからだよ。いや、むやみにでかくて丸くて、一人ではいれば優に泳げそうな。泳がないけど。そんで丸い風呂の真ん中にざーってシャワーっていうか噴水っぽいのが出るやつがあって、そのてっぺんにロードクロサイトで作られたマーライオン様が居座っているんです。はじめて見たな、マーライオン。っていうか、なんでパワーストーンで作るんだよ？

「・・・っていうかさ、なんでみんな甘ロリで飾られてんの？」
そう、そこが一番気になるところ。まさかあたしの趣味リサーチしたわけじゃないだろうし・・・。白兎君のほうを見て聞いてみる。
「リサーチしましたら今度のアリスは甘ロリ好きだと聞いたので」
「リサーチされてたァァァァァァ！！」
「うわ、お姉さんどうしたんですか？」
ううん、なんでもない。なんでもないよ、白兎君。今のは過剰に反応したあたしがおかしいんだよ。

「お姉さん。僕らがリサーチしたのはたぶんお兄様の情報。お姉さんはこの部屋に不快感を覚えますか・・・？」
ちょっと上目遣いであたしを見つめる。うう、可愛いぞチクショー・・・そしてなんで君はあたしの同級生よりも精神年齢が高いの？

可愛すぎて大人すぎるんだよ。あたしの趣味ばっちり押さえすぎなんだよ。

「まさか！お兄ちゃんが好きなのはゴスr・・・・って、そうじゃない！ううん、あたし甘ロリ大好きだし！全然イケイケ！大丈夫だよ！」

「それは良かったです。あ、ちなみにこのあと何時間かしたら夕食ですので、呼びに来ますね。それまでにお風呂とかにも入っておいてください。たぶん食事が終わるのは9時過ぎになってしまいますから、そのあとは遅くて入れないんです。詳しいことはほら、この部屋のマニュアルを僕が作っておいたので使ってください。では、お休みください」

「あ、ありがと」

白兎君はあたしに薄い冊子をわたして軽くチュっと頬にキスをして

――――――

・・・はぁ？

「っキャ――――――！！欧米か――――ッ」

悲鳴をあげて、そのあとツッコミ。あたしの祖国はニッポンなんだ！アイムフロムジャパン！！タカアン●トシをお笑い芸人として世に送り、頬にキスしたりする習慣のないビューティホージャパァァァン！

「わ！ど、どうしたんですか！？」

この調子じゃ、きっとこの国じゃ普通のことなんだろうな。だから欧米かって言ったんだよ。

「ななななななんでもないよななななれてなかかかっただだだけだし！！！？」
うわ読みにく！でも、それだけあたしは動揺していたんだ！きっと今、あたしの頬はくれないに染まっていることだろう・・・。

「ご、ごめんなさい！僕お姉さんがこんなに驚くなんて思ってなかったんです！ごめんなさい！」
「ううううん。だだ大丈夫だよ？白兎君のせいじゃないし」
うん平気。どもりも直ってきた。平気だよ、白兎君。
「・・・そうですか・・？それならいいんです、ごめんなさい・・・
では、僕は執務の仕事がありますから。行きますけど、大丈夫ですよね？何かわからないこととかあったらマニュアルを使用してください。では」
彼は今度こそ手を振って、行ってしまった。

「・・・ふう～・・・まさか白兎君が欧米っ子だったとは・・・」
呟きながらあたしは一応、マニュアルをさらっと読んでみることにした。

『1、困ったときの対処法
何か困ったら、ドレッサーの上にあるベルを鳴らしてください。すぐに誰かが駆けつけます』
「誰かって・・・超ほったらかしじゃん」
『2、お風呂
ネグリジェは洋服箪笥の中に入っています。タオルは更衣室にあるので使ってください。髭剃りはお風呂の中の壁に3つ付いているのでお好きにどうぞ』
「ご丁寧に・・・・。今まで毛とか剃ったことないけど、今夜はちょっとやってみようかな・・・」

そんな気になってしまった。

そのほかにも、鍵の在り処、窓の開け方、その他諸々についても簡潔に説明書きがあったけど、とにかくあたしはお風呂にはいることにした。

ちゃぽ・・・・・・・

「ふぅー・・・・・・」

和む、癒される。このお風呂、最高。マニュアルの最後のほうに付け足しとして豆知識があったんだけど、そのトリビアによるとこのお風呂のお湯は天然の山から流れ出す湧き水を沸かして流してあるんだって。そのせいなのかはわかんないけど、すごく気持ちいい。

「身体でもあらおっかな・・・」

あたしは、長く湯船につかるのが嫌いな方。すぐ出てシャワーの蛇口をひねる。

サァァァァ――――――――・・・

透き通ったお湯が流れ出す。驚いたことに、初めからお湯で出てくる。ほら、よく初めは冷水で徐々にあったかくなるとかさ、あるじゃん。でもやっぱり貴族だし。そういうところは違うのかな。

その後あたしは、いろんな整った設備に感動しながらお風呂を出たのだった。

あたしは、クローゼットを探っている。狙うはネグリジェ！
っていうか、さっきから見ているのをまとめるとぜーんぶすっごい甘ロリ、ゴスロリ、ロリータファッションばっかりなんだけどこれは何？そしてさっき一着だけパンクロリータがあったけど、そこはあえてスルーしましたとさ。

「あ、これ、ネグリジェかな・・・？」
ベビーピンクとふんわりしたホワイトの、絹生地のネグリジェっぽいものを引っ張り出す。嬉しいことにどうやらネグリジェだったようなので、一応着てみることにした。

「うわちっちゃ」
・・・なんだよこれ！！！（鏡の前に立ったときのあたしの感想）
甘ロリなのはいいけど何このめっさミニスカ！おかしくね！？だって、ネグリジェのくせにあろうことかひざまで長さがないというショック！太ももの中盤くらいでふわふわのフリルが終わってるって言う始末。つまりはこのフリルとか取ったら実質、下を着ないとヤバイぜ★状態って言うわけだよね。
「なんつー・・・・・」
ネグリジェだから下がないのは悲しい。でも少食派でよかった。あんまりデブってはいないからあんまり恥ずかしくもない。いや、恥ずかしいんだけどね？

「むう」
断然インドア派だったあたしは肌も白い。これって最早甘ロリっていうところがセクシーな感じに様変わりしてるよね？甘ロリって一応ロリータだから女の子っぽく可愛くするはずなんだけど・・・なんかキュートっていうよりセクスィみたいな？それって困るんだけど。めっさ困るんだけど。

「お姉さーん。夕食の用意が整いましたよー」
「おっと」
部屋の外から白兎君の声がした。
なのでまだまだ納得はしてないものの、ドアを開けたあたしでした。

――――――――刹那

「わー・・・・可愛い・・・・ッッッッ!!!」
叫んだ。

第3話　アリスの部屋（後書き）

光珠は死ぬほどあたしの趣味を詰め込みまくっております。甘ロリが好きなところとか年下好きなところとか。もう分身に近いくらい性格は似てますよー。

第４話　ヤバヤバディナーとデスティニー（前書き）

いろいろと意味不明な話ですね・・・

第4話　ヤバヤバディナーとデスティニー

「うわ、お姉さん?!!」

突然、抱きついちゃいました。

だだだだって・・・!

可愛いんだぜこのコスプレ少年――――!!!

いやいやいや、マジで可愛いというかなんと言うかもう落ち着きを取り戻せてないんだよチクショー!!（落ち着こうね光珠）

だってだって、髪が濡れてまとまってるとことか頬が火照ってたりとかズボンはハーフで白い肌は見えまくり、しかも吊りパンで下は半そでのチェックブラウスで、いやいや可愛すぎますから――――!（訳が・・・）

っていうかもう、これじゃあたしただのショタコンじゃん。そんなのいやだからねあたし。

で、抱きついちゃったんだけど、白兎君はあんまり動揺しませんでした。そりゃそうか、欧米っ子だもんな。

「お姉さん、どうしたんですか?ディナー誘いに来たんですけど」

「行きます行きます、もうガチでついてきます!!!!」

混乱気味。

「フフ、お姉さんってば可愛いんですから。ほら、行きますよ?」

可愛いのは君のほうだよ白兎君!とか思ってたら、ふいに体が浮いた。

「・・・・・・・？って、うわ、キャァァァァ！！！白兎君、おお
お重いからややややめた方が」
気付けば、あたしは姫抱きされてましたとさ☆いや、だから危ない
よ！！！年齢差があるんだってばァァ！

「力はありますから。だってお姉さん、離してくれなかったじゃな
いですか。それなら抱いて連れて行ったほうが早いですから」
「そうゆう問題じゃない！っていうかあたし連れてけるとかマジど
んだけだよ！」
「ちょっと遠いですから、お姉さんが迷子になっちゃいけませんし」
「何かが間違ってると思うよ！って、わ、トランプ？！」
急に、声を上げてしまった。

だってだって、道端に（って言うか廊下の端っこに）でっかいトラ
ンプがあるんだよ？おかしくね？っていうか、あれ――――――

「でででででかいトランプの上にななな生首が乗ってるゥゥゥゥゥ？
！」
「まさか、違いますよお姉さん。ちゃんと手も足も生えてるじゃな
いですか。そんなホラーなものがあったら女王様が気絶しますよ。
ちょ、落ち着いてくださいお姉さん。あれはトランプ兵ですから。
衛兵ですから」
いや、おかしいだろ、なんでそんな紙を雇ってるんだ？！トランプ
でしょ？！紙だからね、トランプって！

「あれは、エースです。トランプ兵の中で２番目に強いんです」
「じゃあ一番は？」
「ジャック。トランプ、やったことあるでしょう？１１番目ですよ」
「うん」
「ちなみに本名はブラック・ジャックです」

「ゲームだったんだ？！」

あたしと白兎君が話をしていると、そのエースさんが敬礼しながら話しかけてきた。

「白兎様、アリス様。お食事の時間まであと２０秒ですがよろしいのですか？」

「マジ？！っていうか様とかいらないから！」

「そうですか・・・今日は生憎と部屋にデスティニー・クロックを忘れてしまいましたから・・・ありがとうございます、エース。トランプカードを１枚あげましょう」

白兎君は軽く会釈をしてポケットからなんかケータイサイズの何かを出してエースさんに投げた。

「ありがとうございます、白兎様」

白兎君はもう振り返らない。代わりにすごいスピードで走り出した。

「廊下走っちゃダメだからァァァァ！！！」

「間に合いませんから。女王様に首斬られるよりいいでしょう」

「首斬んの？！」

「気に入らなければ」

「嘘ォォォ！気違いじゃん女王様！おかしいよ！」

「間違っているものは処刑すべきです」

「だからって殺しちゃダメだし！って言うかこんなに走ってんのに未だにつかないの！？」

「遠いですから」

「遠ッ！！！すごい遠い！」

って言うか、白兎君はずっとお姫様抱っこのまんまなのに疲れないのか？半端ないよ。

っていうか、さっきから疑問に思ってるんだけど、耳があるべきところにうさ耳が生えてるんだよね。これはもしかしてあれか？もし

かしなくっても・・・ううん、考えるのはやめよう・・・

「さ、つきました」
白兎君がようやく止まった。っていうか、あんな俊足で走ってたのに息切れひとつしてないんだよね。なんで？人間業じゃないね。っていうか、人間じゃないのかもしれないんだけどさ。
「ねえ、白兎君。その耳、本物？」
あたしってば聞いちゃった――――！？
「え？面白いことを聞きますね。本物に決まってるじゃないですか♪」

・・・・・・・・本物なのかよ。

・・・・・・・・それは、想定外だったよ。絶対コスプレだと思ってたのに・・・

「まさか、お姉さんこれがピン式のうさ耳とか思ってたんですか？！」
はい、思ってました。絶対コスプレだと・・・・

っていうか、こういうショックもたまにはあるよね。うんうん。（現実逃避）

中に入ると、もうほぼ全員が入っていて、食堂はいっぱいだった。っていうか食堂っていっていいものじゃなかったりするのかな。大広間だよ、むしろ。
女王様は入り口から一番遠い、玉座っぽいものに座っていた。その

右隣に2つほど席が空いている。

「・・・・・あそこで食べんの？」

「え？そうですよ。お姉さんが一人だと可哀想でしょう？」

「あぁん・・・・・」

悶えながら萌えるあたしに一言、

「というのはほんの冗談で、ただ女王様の計らいです」

「ひど！！そういうのは普通言わないようにしよう！！！」

「で、ですが・・・嘘をつくのは僕のシップに反しますから・・・」

「例外だよこういうときは！」

まあ、白兎君に女の子を口説くネタを教えたいわけじゃないんだけど。

「早く行きましょう。女王様がお待ちですから」

「う、うん」

あたしは白兎君に手を引かれて、玉座に上がる。それで一番右端で夕食を食べ始めた。

でも、出てくるのはもう全部全部豪華絢爛なお食事ばかり。

「わぁ・・・こんなの毎日食べてたら太るだろうに・・・女王様も白兎君もシルエット綺麗で、どうやってるんだろう・・・」

「あ、お姉さん。これは今日はアリス記念祝いの日だから豪華なだけでいつもはレバニラとか普通ですから」

「詐欺？！」

城でレバニラかよ！あたしレバニラ超嫌いなのによくも・・・っていうか、城でレバニラが出てくることがおかしいよね。秋刀魚の塩焼きとかも出るよきっと。

「ん」

そういえば、思い出したことがある。
さっき、エースさんと話してたときに「デスティニークロック」という単語を聞いた。あの「デスティニークロック」ってなんだろう。
デスティニーは運命。クロックは時計。直訳なら運命の時計だよね。

「白兎君」
「なんですか？」
「デスティニークロックって何？」

「あぁ・・・・あの単語を憶えてしまいましたか・・・デスティニークロックっていうのはですね・・別名『白兎とアリスの時計』といわれ、代々我が家に伝わってきたものなんです。あの時計があれば、間違いなく白兎はアリスと出会うことができるという。けれどあの時計は何かとても強い力がありまして、それは僕にもよくわからないんですけど・・・とにかく不思議な時計なんですよ？」

「違和感ないけど？」
「あの時計、変なところに気付きませんでしたか。針が5本あるんですよ。秒針が一本に時間と分針が一本ずつ、あとどの針にもなっていないすごく細い針が2本、ちゃんとついてるんです。まあいつもは時針と分針に隠れてて見えないのも仕方ないですが・・・とにかく、何かあるときにその針は時を刻みだすのだそうですよ」
「へぇ・・・・」
見てなかった。そんなものがあったんだ。でも、なんでそんな針がついてるんだろう？

『白兎とアリスの時計』、そんなもの誰が作ったの？

ちくたく

ちくたく

時計は時を刻む

あなたはその時計を

どうやって使いますか？

☆
★
☆

そのあとあたしは、その時計のことをすっかり忘れてしまった。

夢の中にこっそりとデスティニークロックが現れたのも知らずに――――――。

第４話　ヤバヤバディナーとデスティニー（後書き）

えっと、エースさんとかジャックさんは次々回登場あたりに説明したいと思います！

第5話　混沌だったお茶会（前書き）

うぅ・・・・・更新が遅れてしまってすみません・・・・

第5話　混沌だったお茶会

「え？お茶会？」
白兎君に言われたのは、今日の朝方だった。

＊・・・。・・＊・・・。・・＊・・・。・・・＊

今日は、すごーく暇。
だって、昨日女王様にも会っちゃったし、白兎君も遊びに来てくれないし・・・それに、城の中の散歩だって、絶対迷子になるからできない。あたしは、ベッドの上でぼんやりと天井を見上げていた。

「・・・セクシーなネグリジェで寝てますね」
「わっ！？」
突然、部屋の隅から声がした。な、何？！

「・・・・・白兎君・・・」
そこに立っていたのは白兎君で、白兎君はスッとこっちに歩いてくるとベッドの上に座った。白兎君の銀髪が揺れて、すごく神秘的な感じがした。

「・・・・って。セクシーなネグリジェで寝てますねって、このネグリジェクローゼットに入れたのキミでしょ」
「違いますよ。まさか僕も女のアリスが来るなんて予想はしてなかったので昨日の謁見の間にメイドに入れ替えてもらってたので」
「え～・・・・じゃあ、これのサイズいくつなの？」
「たぶん・・・・１７０」

「嘘？！いつもあたしが着てるのよりも２０センチもおっきいのにそれは無くない？！」
だってね、太もも前半まででずっとフリル使ってんのに、普通に１７０の人が着たらもう丸見えだからね？
「そんなに暇なら、お姉さん。お茶会にでも行きませんか？」

＊・・・。・・・＊・・・。・・・＊・・・。・・・＊

で、今に至る。

「はい。ちょっと遠いですが僕を追ってこれたお姉さんなら平気ですよ」
「え・・・いろいろとツッコみたいところはあるけど、まず先にそれはどこでやってんの？」
「はい、海辺で。潮の香がとても素敵なところです」

・・・・・知らねーよ。

一時間後。
あたしは今、川沿いの草の上を歩いてる。
「・・・って、ちょっと待て！！！！なんで一時間もかけてまだ川の横歩いてんだあたしは――――！！！！」
いや、いくらなんでもこれは遠すぎだろ。なーにが『お城を出てすぐの川をずっとたどれば海に出るはずです。そしたら右の方にずっと歩いていってください。で、柊と蔦に覆われたレンガ造りの家が見えたらその家の向こう側にお茶会会場はありますよ』だ！！白兎

君ったら可愛いな！！！（ぇ）
いや、一応ここまで走ってきたんだ。４分の１くらいは。そりゃ、足は遅い方じゃない。でもそれは短距離走のことで、こんな何キロも歩くみたいなのには向いてねーんだよ、あたしの足は！

「つ・・・・つかれたな・・・・・・」
呟いてみる。うん、でも、ちょっとだけ潮の香もしてるし、もうそんなに遠くは無いはずだ。

ほら。もう、丘の向こうにコバルトブルーの海が見えた。どんな人たちがお茶会に参加してるんだろう？

そこから先は、思ったほど遠くなかった。３００メートルも歩くと海岸に出た。
「え・・・・っと、右、だったよね？」
どっちを向いても海が広がってる。おんなじ景色が続いてる。どうせね、また長い道のりなんだから間違うことは避けたい。
あたしは、その海岸を右に歩くことを決めた。

３分後。
「もうヤダー！！！なんでこうもサンダルの中に砂が入りまくるんだ？！」
ここの砂は、星の砂。星の砂は、星の形だから星の砂なわけで、靴に入るとそれなりに痛い。しかも今日はオシャレのためにミスティーブルーのミニワンピースにナチュラルグレイの七分でフリルたっぷりの上着を羽織って、靴はシルバーホワイトでリボンやレースがたっぷり飾られたサンダルなんだ。甘ロリじゃないのは癪だけど、大人っぽくて綺麗なこの格好の中に砂がなだれこんで、あたしはどしたら良いの？

「・・・・？あれは・・・」
視界に、緑に包まれたブラウンピンクの建物が入った。まさか、こんなに都合のいい話ってないよね？あれは、もしかして、白兎君の言っていた『蔦と柊に覆われたレンガ造りの建物』なのでは？

「・・・上出来じゃん」
近づいてみれば、そのとおり。明るいシナバーグリーンの蔦とパーマネントグリーンの柊に包まれた赤っぽいレンガ造りの家だった。
「・・・・つ・・・・ついたぁ～・・・・・」
所要時間1時間と23分ほど。うぅ・・・・・足が痛い・・・
さあ、もう一息。この家をこせば、お茶会場が・・・！

そう思って行った途端、目に入ったのはとんでもない光景だった。

「やーだ。良いじゃん、触らして～～」
「バカ！！！理性を取り戻せ、理性を！！！！子供の前で教育に悪いだろ！」
「理性なんてもの、あたしにはないの～～♪」

「・・・・・なんじゃこりゃ・・・・・」

突然、視界に入ったのは、カオスな3人組だった。
いや、まず状況説明だ。えーっと。髪の毛が長くってうさ耳が生えてナイスバディなおねーさんが、メガネっ子でかっこいいお兄さん

を襲って、もう少しでタキシードを脱がせそうになってる。その横の方では、ネズミの耳が生えた可愛すぎる男の子が眠たげな瞳で二人を眺めてる。

・・・どう考えても、これって子供に見せちゃいけない現場と思うんだあたし。って言うか、その前に、

「なにしてんの？」

っきゃ――――！！！訊いちゃった！！！！！良いのかあたしいいのか？！どうなっても知らないよあたし！

「・・・あぁ」

「お客様？」

すぐに兎のお姉さまは理性取りもどしたっぽい。イケメン君の上からどいて、服装を整えだした。

イケメン君はといえば今更のように赤面しながら洋服のボタンを閉め始めた。

☆★☆

「・・・・・びっくりしただろ？ゴメン」

砂を落とし終わった彼は、最後にでっかいシルクハットを被ってこういった。

「そうですね。びっくりするなんていう可愛い言葉じゃすまないくらいびっくりして心肺停止するかと」

「・・・・ゴメン」

「いえ・・・・」

「貴女、どうしたの？迷い子さん？」

「バカかお前は。とりあえず初めに謝れよ。あんな現場見してどうすんだよ。はー・・・本当に悪かったね。こいつは三月兎、こっち

はヤマネ、俺は帽子屋って言うんだ。全員呼び捨てで結構だよ。君は・・・？」
「あ・・・あたし、莉出光珠って言います。こっちの世界じゃいつもみんなアリスって呼ぶけど・・・」
あたしがそういうと、彼らは驚いた顔をした。

「・・・・ニューハーフ？」
「何故そうなるっ！！！純粋なオンナだよあたし！？」
「だって、アリスは男じゃん」
「だからぁ・・・いいよ、説明するよ」
もう、誤解を解きたいがために細かく説明しましたとさ。

＊・＊・＊・＊・＊

「・・・ふうん・・・そっか。」
「大変ねぇ・・・」
「まったくですよ。っていうか、ヤマネ君はしゃべらないね・・・って、寝てるのかよ！！」
「ああ、ヤマネ？気にしなくっていいよ。コイツいつも寝てるからさー」
にしても、ヤマネ君可愛いなぁ。瞳の色はよくわかんないけど、髪はライラック色。黒鼠色のネズミ耳がすごく可愛いんだよなー。
三月兎も華麗で美麗。耳の先と瞳は桜色で、髪はクリーム色。この人１６歳なんだって。体のラインとギャップな童顔がそそるんだよね。ってあたし誰だよ。
帽子屋は１８歳で一番年上なんだって。髪の色はシルバーがわずかに混ざったオリエンタルブルー。瞳は水底のように蒼くて深い群青色。なんかこの世界の人って髪の毛の色とか瞳の色とかが特徴的だ。うらやましいなー。

「・・・・なに俺たちのことじろじろ見てんの？」
「あ！ごめん・・だってみんな顔立ちも整ってて美形でいいなーと思って」
「やだなー♪アリスだって肌は白いし髪の質だっていいじゃない」
「昔からニート並みに外に出なかったからね。髪の質がいいのはなんでか知らないって言うか、三月兎だって肌すごい綺麗じゃん」
「メルチェって呼んでよ。３月って意味なんだって」

と、ふいに声が（音が？）した。
「うぅ・・・・・ん」
ん？！も、もしやこの幼い声は・・・！

「ヤマネ、目覚めたか」
寝ていたヤマネ君が、眠たげに目をこすりながら頭を起こして、上目遣いでこっちを見た。
「お客様・・・・・？」

「・・・・・・・・・・かわいいっっ！！！！」
ハイ、もれなく抱きついちゃいましたとさー。

それから家に帰ったのは、とっぷりと日が暮れてからだった。
白兎君が心配して迎えに来てくれて、あたしはみんなと（主にヤマネ君と）の別れを惜しみながら帰っていったのでした。

「大げさですね。どうせあのお茶会は毎日やってるんですから行けばいいのに」
「だって、道のりが遠いじゃん・・・・・」
「え？何言ってるんですか？お城の裏口を出てまっすぐ行けばものの１０分程度でつくのに」
「・・・・先言え少年――――――！！！」

第5話　混沌だったお茶会（後書き）

ちょっと、遅れまくった割にはたいした内容じゃないですよね。次は紅姫をやりたいと思います。もう放りっぱなしなので・・・

第6話　爽やかなる朝（前書き）

はい、気付いたら更新するのめっちゃ久々なんだぜ！！
すみません・・・・長らく更新せずに・・・（泣

第6話　爽やかなる朝

君は月に何を願う
夢？希望？それとも野望？
僕は何も願わない
何も思わない
ただ一つだけ願うのは
愛しい君に出会うこと――――

＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊

「んーん」

目覚めは今日もいい。
枕元には毎朝置かれている綺麗でおいしい水があった。
あたしはそれをそっと持って、カッと天を仰ぐ。

「おいしぃ――！！」

・・・はい、すみませんね朝っぱらからあられもない声出して。
とにかく、今日はすっきりと目が覚めた。
それはこの甘くておいしい水を一気飲みしたからか、眩しい陽光が

レースのカーテンから差し込んでくるからなのか。

「あ、そういや昨日窓閉めんの忘れたわ」

瞬時に思い出した。

昨日は、月がものすごくまん丸で、窓を開けて月を眺めていたのだ。

「・・・・・ああいうのを望月っていうのかな」

昨日の月はとても明るく白い光を発していた。

「・・・・・・うーん？」

でも変だ。なんで月があるんだろう。地球にいないと月は見えない、はず。だけどここは、地球上じゃない・・・よね？

考えてみれば、あたしってこの国のこと何にも知らないんだ。何処にあるのか？何がはやっているのか？誰が住んでいるのか？面積は？人口は？首都は？交易は？全然、何にも知らなかった。

・・・・そんな思いにふけっていると、突然あたしのそばで白兎君の声がした。

「お姉さん、何か考えているんですか？」

「わわ、白兎君！」

気付けば、枕元には白兎君が優しい微笑みを浮かべて佇んでた。

「朝ごはんが仕上がっていますよ」

「ん。ごめんね」

急いで白兎君が差し出してくれた手につかまって、ベッドから立ち上がる。

あたしよりも小さい白兎君から、甘い花のような芳香が香る。たまらず白兎君の柔らかな身体を抱き締めたあたしの背中に白兎君の腕が回された。そしてちゅっと小さく頬にキスをする。うん、さすが欧米っ子。ビューティフォーヨーロピアン&アメリカン。

またしても遠い食堂に着くと、今度は懐かしい鯖の味噌煮の香りが

漂ってきた。
「今日のメインディッシュは鯖の味噌煮です」
「めっちゃ庶民！！！」
「鯖には最高級城内養殖のトランプマクレル使用」
「と思いきや実は豪華！！！？？？」
あたしは、いろいろ叫びつつも席に着く。

・・・・って言うか、お食事の時間って決まってないのかな。昨日の夜食は全部席が埋まってたけど、今日はぽつぽついないところがある。その辺はルーズだよね～。

ご飯を食べ終わったあと、部屋に戻ると、いつの間にかベッドの上に黒・白・ピンクで色づけされた洋服がおいてあった。

「こッ、これは・・・・・・ッ！！」
まさか、
ゴ　ス　ロ　リ　というやつなのでは――――――？！
「ヤバイ、ヤバイよこれは。ちょ、ヘルプ――――！ヘルプミ――――！」
叫んでみたら、途端にバン！！とすごい音を立ててドアが開き、頭にフリルをつけたキュートなメイドさんが入ってきた。
「・・・・・・・・誰？」
いや、自分から呼んどいてそれは無かろうと思われるかもしれない。でもね、多分こーんなスーパーキュートなメイドさんなんてあたし見たことないししかもバン！って音するとかもうどんな力だよってカオスなんですけど。

「まあ、アリス様！申し訳ありません！わたし、お城のメイドのメアリ・アンです」
「あ、そー・・・・あたしは光珠・・・・ってそんなことはどーでもよくって！なんなのこの服！」
「え？とってもかわいらしいですわ？」
いやそーゆーこと言ってるんじゃなくてさ。おかしいよねみんな。つーかなんでこんなものが簡単に用意されちゃうの。
「これ、あたし着なくちゃダメ？」
「あら！嫌なのですか？甘ロリの服は着てらっしゃったのに」
「好みの問題で・・・いやいや、そうではなく（焦）」
「いいじゃないですか！」

にっこりと満面の笑顔を浮かべるメアリ。ああ、その笑顔が憎いですわ、メイド様。
「・・・・・・・・・・・・・・いいよ、わかったよ」

というわけで、強制的に圧力をかけられてゴスを着用しているあたし。
「うわぁあ・・・・・・」
やばいよ、やばいよこれは。こんなん誰が作ったんだろう。ってかこんなの用意すんな！！
「ほら！お似合いですわアリス様！」
「そ、そう・・・・？」
鏡の前でちょっとポーズを取ってみる。色的には合うんだよね。好みなら甘ロリの方がいいんだけどね。
「うーん・・・・・？」

「あら？お気に召さないので？」
「ううん、かわいいよ」

そのまましばらく鏡と問答していたらメアリの強烈なお勧めが入ったので今日はこれで過ごすことにした。

「暇だ・・・・・・・」
ぼんやりと天井を見上げてみる。いつもと変わらない。当然か。

つまんないから散歩することにしてみた。
庭には珍しく誰もいなくて話し相手も見つからない。しかたないから近道は使わずにお茶会に行くことにした。

・・・・２０分後。

「・・・・・・・・ここどこだ」
完璧に迷った！！見たことのない川沿いにいるのです！！たぶん目印の川が途中で二又になってるのを忘れてぼんやり歩いてきてしまったからに間違い無く。

泣きたくなってきた。
と、目がぼんやりと滲んできた頃耳に低くて透き通るような青年の声が入る。

「お困りだね、アリス」

「え」
ガッと振りむいた瞬間首がグキってなる。
「いったぁぁあ！！！」
いいようのない痛みが走って本気で涙が出てきた。ってか、寂しさの涙に便乗して出てきただろこの涙ぁ！！！
ってか、今一瞬忘れてたけど声の主は誰なんだ？
痛みをこらえて袖で涙をぬぐいつつ声の方向を見る。と、そこには。

「ねこ・・・・・・？」

猫耳を生やした少年がでかいリングノートを抱えてたっている。でも、その格好が尋常じゃない！
猫耳の色はピンクと紫のボーダーで、同じ模様の尻尾がゆらゆらしている。髪の色はチェリーピンクでめちゃくちゃ目に痛い。長い前髪の奥ではガラス玉のような菫色の瞳がキラリと光る。
黒いロングコートを羽織ったその青年は絵のように整った顔立ちをしていた。・・・って言うか、まず猫耳を生やしていることに疑問を持とう私よ。

「誰っスか・・・？！」
いや、この世界で紫とピンクの耳や尻尾を持つ生き物ったらまぁ・・・
アレしかいないんでしょうけどね。

「決まってるじゃん。チェシャ猫だよ」
「ギャァァァァァ！！！！！本気で本物だったぁぁぁぁぁぁぁ！

！！！！！！」
強烈に叫び声をあげるとあたしは全力で走り出した。しかし、現実はそう甘くない。
ふと後ろを見たらチェシャ猫と名乗る青年はいなくなっていた。
「はぁーふりきっ・・・・」
前を向いた瞬間、何かにばふんとぶつかった。何か甘い香がふわっと漂うあったかくて柔らかいもので・・・・・ん？
「っきゃ――――！！」
もちろんチェシャ猫ですとも。目の前には、いつ来たかわからないけどチェシャ猫さんがいた。
また叫ぼうとすると、手で口をぐっとふさがれてしまった。

「ねえちょっと黙って、話を聞いてよ。あのさ、僕貴女にひとつも被害及ぼしてないよね。どうして逃げようとするの？」

その瞬間手が緩んだからあたしは頑張って手をどけた。
「――――ッぷはっ・・・だってこの世界で会う人会う人みんな意味わかんないもん――――きっとあんたもそうなんでしょッ！？」
「残念。僕は皆の中でも多分常識あるほうだよ」
「うそっ・・・無理無理無理無理無い無い無い無いチェリーピンクの髪してる人常識人って！！！」
「え？ああこれ地毛。それよりありす、貴女今からお茶会行こうとしてるよね？」
やばい。思考を読まれている。
「今日はお茶会やめにして僕とちょっと遊んでくれない？」

・・・このときすでにあたしは手足を解放されていた。それでも動けなかったのは、目の前三センチくらいにチェシャ猫の顔があったからだろう。
不純だとは言わないでほしい。いくらあたしのやばいメーターがぎゅんぎゅん上がっているとしても、相手は普段滅多にお目にかかれないような超美形だったのだ。あたしは年下超好きといったけど、それはあくまで可愛いから。恋愛対象としてじゃないんだ。

というわけで。

「う・・・・・ん」
嫌だなんていえなかった。「うん」の一言しかいえないくらい、そのときあたしはダメになってたのだから。
あたしが小さくうなずくとチェシャ猫はにこりと笑った。

「じゃあ、いっくよ――――」
チェシャ猫はそういったかと思うと、突然あたしを姫抱きして、大空に跳んだ。

「ッきゃぇぇぁぁぁああああ！！！！！！？？？いやだぁぁあああなんで皆して空跳ぶんだぁぁあ！！！！！」
「んー？猫の跳躍力、気に入ったぁ？」
「言ってない！言ってない！」
初めてこの国来たときも、確か白兎君に姫抱きされて、空を跳んだ。

・・・・・・・どこが「皆より常識ある」んだよぉぉぉぉ！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0474f/

不思議の国へガーリーアリス

2010年10月9日00時07分発行